

## はじめに

人は、何のために生まれて来るのであろうか。その問いに対して現代科学は、「偶然に生まれて来るにすぎないので、個人の誕生に目的や意志などあるはずがない」と断定的に答える。では、そのような考えかたが科学的に裏づけられているのかと言えば、科学者の意に反して、実際にはそうではない。その「裏づけ」は、「科学的に考えれば、偶然以外にありえない」という同語反復的な論証以外には存在しない。したがって、これは、科学者が持つ一種の（自覚なき）信仰と言ってよいものであろう。科学とは、人間が、観察や実験を用いて行なう、人間の本性に基づく創造活動と言える。それゆえ、これまでの科学知識体系に基づいて論証や推定を行なうことは、科学者であることを放棄するばかりか、知らず知らずのうちに、人間の本性をも放棄することになりかねない。

聖書にも述べられている通り、人はパンのみにて生きるものではない。人間は、自らの肉体を維持するための「生の本能」を持つ一方で、能力的、人格的向上を希求する性向も抜きがたく備え

た存在なのである。科学や芸術という営みも、その反映と考えてよい。また、そうした願望を実現する目的で、人間は、修行という方法も編み出している。しかしながら、その修行に邁進したとしても、自らを——特に、その能力よりも人格を——向上させることは、現実にはきわめて難しい。それは、いわゆる克己心が、自分の中の「悪魔」に絶えず敗北するためである。

現在、その令名をますます馳せている、昭和初期に活躍した詩人・中原中也は、まさにそのことを、「ふつう」の人たちとは逆の方向から実現するために生きた、稀有な人物と言えるかもしれない。結核性疾患のため三〇歳で夭折するまで、一度として定職に就かず、パンのみにて生きる生活を最初から完全に放棄し、詩作という「神の口から出る言葉」を自らの「労働」としていたからである。そして、作品の中で、その成果を高らかに歌いあげた。もちろん、その生きかたは、世間一般の目から見れば非常識の極みであり、まさに自滅的生涯以外の何ものでもないかもしれない。しかし、その裏には、それとは正反対の意志が見え隠れしているのである。本書は、そのことを、私の心理療法医論に基づく人間観から明らかにしようとする試みである。

三〇年以上にわたって心理療法を専門としてきた、およそ文学には縁遠い人間としては、中也の作品そのものについて述べることはできない。できることがあるとすれば、それは、中也の心理的狀態や行動および、作品の中で行なわれている主張に関する検討にほぼ限定される。中也は、長年にわたって、友人たちを辟易させるような、信じがたいほどの奇行を何度となく繰り返ししてきた。そのため、ほとんどの友人が中也から遠ざかった時期もあった。ところが、このように自滅的に見える生涯を送ったにもかかわらず、ふしぎなことに、中也は、心底では友人たちに、う

そ偽りなく愛されていたのである。そのことは、友人たちによる、中也に関する伝記的な文章や書籍が大量に存在することからもわかるであろう。当時は、そのほとんどが無名に近かった友人たちが、その後、なぜか有名になったという事情もあるが、中也の人となりを描いた文章が豊富に残されている事実を、それだけで説明することはできない。フランスの詩人アルチュール・ロンボウの場合と同じく、中也は、その作品ばかりでなく、その生きかたに対しても、人々の関心をいたくかき立てるのである。

中也は、その短い生涯の中で、精神病的状態を二度にわたって示しており、それについては、これまで何人かの精神科医がそれぞれの見解を述べている。その症状は、精神分裂病（昨今の診断名では、統合失調症）を思わせるものであるが、にもかかわらず、分裂病という診断をはつきりと下した専門家は、これまでのところ、ひとりもないようである。それに対して、中也とほぼ同時代の作家であった島田清次郎は、まさに精神分裂病（当時の診断名では、早発性痴呆）を発病し、府立東鴨病院（都立松沢病院の前身）に入院している。ふたりは、「その奇行を以て身辺の者を一人残らず悩ました」（河上、一九七四年、九ページ）という点でも、幻覚妄想状態に陥ったという点でも、ほとんど同じであった。にもかかわらず、その診断が異なるのは、なぜなのであるうか。

当時、中也の親友であった大岡昇平は、「自分と同じやうに不幸になれ」（大岡、一九四八年、四九ページ）と、中也に命じられたという。このことからわかるように、中也は、「不幸の詩人“あるいは”悲劇の詩人“と言われている。とはいえ、中也の言う不幸とは何なのであるうか。

中也が、特に青少年に人気があるのは、悲劇の詩人的側面が際立つて見えるからであろう。しかし、中也は、同時に「恩寵の詩人」でもあるし、「述志の詩人」でも「希求の詩人」でもある。悲劇の詩人と述志ないし希求の詩人というふたつの側面は、どのような関係にあるのであろうか。本書のひとつの目的は、その点を明らかにすることである。

本書には、それ以外の目的もいくつかある。そのうちのひとつは、病跡学（パトグラフィ）という研究分野の現状に対して、私なりの疑念を表明することである。たとえば、ある病跡学者は、「詩作が現実における挫折、疎隔を代償し、中也の自我の崩壊をくい止めるのに役立つ」とは疑いもない。この点、『中也は分裂病発病の危機を克服しつつあった』という大岡の意見は素人ながら正鵠を射抜いたものといえよう（春原 梶谷、一九七一年、一〇四ページ）と述べている。時間をかけ、丹念に検討しているわけではないにもかかわらず、作者に対しても、その研究者に対しても、こうした、高みから見下ろすような物言いが平然とできる現今の病跡学とは、いかなる分野なのであろうか。

また、この発言からもわかるように、特にわが国の病跡学には、「作者は発狂寸前の危機においこまれ、創造という行為によってかろうじて危機を回避する」（加賀、一九七三年、一七ページ）という主張がある。そして、「狂気のかわりに作品が生まれるのか、あるいは作品を生みだすと狂気が抑制されるのか」を明らかにするには、「作品の創造という行為が何であるかを知らねばならない」（同書、一七ページ）とされる。これは、精神医学史の著名な研究者であったアンリ・エランベルジェが唱えた「創造の病」理論を念頭に置いた考えかたなのかもしれない。しかし、も

しその考えかたが正しいとすると、現行の生物学的精神病観と深刻な矛盾を来すように思われるが、そのような心配は無用なのであろうか。また、「発狂寸前の危機においこまれ」た作者が、「創造という行為によってかろうじて危機を回避する」という主張自体の妥当性については、どうなのであろうか。本当にそのようなことが起こるのであろうか。

本書にもうひとつ目的があるとすれば、それは、主観というあいまいなものに基づいて行なわれてきた文学作品の鑑賞や研究に、ある意味で客観的な指標を導入できるかどうかを、私なりの角度から検討することである。文学のみならず、芸術一般について言えることであらうが、こうした分野では、客観的指標が全くと言ってよいほど存在しないため、作品の鑑賞や評価は、各人の「見る目」に全面的に任されてきた。一九五〇年から中原中也全集の編纂に繰り返し携わってきた詩人も、「そういうほそい（個人的）体験の紐をつうじてしか、人が詩とつながることはありえない」（中村、一九九〇年、七ページ）と書いているし、ランボウの翻訳で知られる文芸評論家も、「こういう解釈は、絶対にどれが正しいということはない。読む方が勝手に感じとっておけばいい」（粟津、一九七五年、三一ページ）とまで述べている。本書で試みている客観的指標の導入がわずかにせよ成功したかどうかについては、読者の方々の判断を待つ他ない。

最後に、本書が執筆されるに至った経緯を簡単に述べておきたい。私の開発した心理療法には、「中級者クラス」と呼ばれる方法がある。これは、第3章で説明するように、通常の「初級者クラス」の応用編で、後述する反応させえ出れば、その中で扱う内容は何であつてもかまわない。そうした治療を続ける中で、たまたま中原中也という人物が浮上し、中也の人となりや作品について

詳細に調べる必要に迫られた。そのため、中也に関する資料を、作品の初出誌も含めて大量に入手し、さまざまな角度から検討を重ねることになったのである。その作業は現在も継続中であるが、現段階での『研究成果』が本書である。したがって、本書は、私の心理療法を実践する中で生まれた予期せぬ副産物と言える。中也の生活史が、日本の作家の中では異例に詳しく掘り起こされ、しかもなぜか公表されているおかげで、このような試みが可能となったのである。私の事務所は、現在、中也をはじめ、安原喜弘、小林秀雄、河上徹太郎ら、本書に登場する人たちがかつて関係していたいくつかの場所に近い、品川区西五反田にある。それまでは、大田区池上二丁目の、本門寺近くの一般病院に勤務していた。その一八年の間、毎年一〇月二二、三日に、中也の詩に登場する池上本門寺お会式的一端を、勤務先からの帰りに、眺めるともなく眺めていたのである。また、既に二十数年にもなるが、仕事先との往復時に、中也が一時住んでおり、最初の精神病状態が起こった北千束の下宿の近くを、電車で毎日通過している。かつて中也は、今の私のすぐ近くにいたのである。

本書は、最初、本年三月に上梓した拙著『幸福否定の構造』（春秋社）の一部として計画されていたが、あまりに肥大しすぎたため、結局、独立した一書として世に問うことになった。私にとっては全く専門外の分野での研究であるため、初歩的な勘違いや誤りが少なからず混入したのではないかと危惧している。読者の方々のご叱正をたまわれれば幸いである。

出版不況のおり、本書が、このように早い時期に日の目を見ることができたのは、麗澤大学出版会編集長・西脇禮門氏のおかげ以外の何ものでもない。深い縁を感じつつ、ここに深く感謝す

るものである。

二〇〇四年九月

笠原敏雄

【付記】 厳密性を問う読者の利便性を優先させることにしたため、文献を引用する際には、科学文献でふつうに行なわれているように、本文の括弧内に当該文献と掲載ページとを明記した。少々読みにくいかもしれないが、ご了承いただきたい。註は当該ページの左端に（その余裕がない場合には、二ページ後の左端に）、参考文献は巻末に五十音順にまとめて示した。また、再刊書や論文の再収録書ないし再掲誌がある場合には、大岡の要請（大岡、吉田、一九八三年、九ページ）に従って、できる限り、初版や初出誌から引用するよう努めた（ただし、加筆や修正が行なわれている時には、むしろ再刊書や再収録書のほうを引用した）。なお、引用文中のかぎ括弧は、その文章を理解しやすくするための私の補足である。